【映画紹介】

世界が絶賛、野球映画の傑作『いつまでも0(ゼロ)』

日本映画の新星・小津沢明監督(38)の話題作『いつまでも0(ゼロ)』が、今年のカンロ国際映画祭で見事グランプリを獲得した。この作品は、『今日でしょ』『半返し』に続く、小津沢監督の野球映画シリーズ第三作目にあたる。

映画は、高校の野球部長・佐藤健一(26)が、偶然に発見した戦時中の野球部員たちの日記に興味をもち、当時を知る人々を訪ね歩いて話を聴くなかで、スポーツと平和の意味を改めて問いかけるという内容。

物語は、小津沢監督ならではの淡々としたコメディータッチで描かれていくが、ラストシーンで「0(ゼロ)」の並ぶスコアボードを見上げる主人公の後ろ姿に多くの観客が涙を誘われる。

また、細部にまでこだわった演出もみどころのひとつだ。たとえば、戦前の剛腕投手・楠本保(明石中一慶大)が登場する回想シーンでは、元大リーグの野茂英雄投手のトルネード投法と同様、一度体を捻って二塁方向を向き打者に背中を見せる豪快な投球フォームが再現されている。

カンロ国際映画祭 審査委員長の話

小津沢監督は、つらい時代を明るく生き抜く普通の少年たちを水彩画のような独自の表現で描いています。この作品は、映画が本来もっている可能性を我々に再認識させてくれました。

小津沢監督のコメント

素直にうれしいです。苦労して自主制作した甲斐がありました。でも、陰で「ウケ狙いの駄作」と言う人もあり、借金が10億も残っています。なので、次は、もっともっとがんばってアメリカのアカベビー賞も制覇し、国民名誉賞を目指します。今回は、本当にありがとうございました。

すっかり巨匠気分の小津沢監督。次回作は、高齢社会をテーマにした野球映画『バババとGGG』になる予定。 (文責・淀川)